

序

母語を使うかどうかは別として、文学創作において、一つの作品を決定づけるのは、表現の主体・表現の対象・表現の媒体という三者間の関係である。この関係をどのように成立させるかは、文学の普遍的、根本的な問題である。

しかし、非母語が表現媒体に選ばれた時、その三者間の関係成立の複雑さがいち早く表面化し、先鋭化する場合がよくある。非母語による文学作品を分析することは、取りも直さず文学創作の本質をあぶり出し、俎上にのせることである。のみならず、非母語文学の受け入れ方も当然研究の視野に入って来る。

「日本語文学」を一つの分野とする研究は、約20年前から始まり、在日朝鮮人の作家、台湾出身の作家、母語日本語を相対化する作家に関する研究が行われてきている。「越境者」「越境文学」という言葉はすでに耳新しくないものになっている。

なぜ、非母語の日本語を表現媒体に選び、日本語を理解できる人々（大半が日本人）を読者として想定したのか。その場合、作家は何を表現し、どのように表現したのか。それらの作品は、日本人読者にどのような反応を呼び起こしたのか。そのような反応は、日本社会の何を反映しているのか。「日本語文学」は、日本文学にとって、どのような意味をもつものになっているのか、あるいはなっていくのか。

これらの古くて新しい質問に答えるための試みとして、2010年1月29日、国際日本文化研究センターにおいて、シンポジウム「日本語で書く——文学創作の喜びと苦しみ」を開催した。外国生まれの作家が日本語を用いて創作した近年の文学作品にどのような言語的、文学的、文化的、社会的特徴が現われているのかを検討した。研究発表、作家座談会、総合討論会、と三部に分けられている。

研究発表では、2000年に創設され、外国人留学生の日本語創作の大きな推進力となっている「留学生文学賞」の設立経緯（栖原暁）、日本語文学の

代表的作家リービ英雄の日本語表現の特徴（牧野成一）、芥川賞の受賞者で、日本語を非母語とする楊逸の文体における中国語と日本語のハイブリッド性（谷口幸代）、日本語と日本文化の習得を経験した作家たちの作品に共通する性格（郭南燕）に関する四本の発表があった。

作家座談会では、現在日本の文壇で活躍している詩人田原、小説家シリン・ネザマフィ、随筆家・詩人ボヤンヒシグ、小説家楊天曦がそれぞれの創作経験を披露し、創作過程で味わった喜びと苦しみを教えてくれた。この場では聞けない貴重な発言が多くあり、日本語文学を研究する上で重要な参考資料ともなりうる情報を数多く提供してくれた。

総合討論会では、前記の発表者と作家に、文学と文化の研究者であるジェフリー・アングルス、伊藤守幸、稲賀繁美、鈴木貞美、トゥンマン武井典子、中川成美、細川周平の諸氏が加わった。諸氏は、非母語による表現の主体と媒体との摩擦関係、言語の違いを超えた創作の動機、非母語が与える新しい言語感覚と美的効果、作家の心理的境界線の越え方、非母語の使用における制約中の自由度、緻密な作品分析の重要性、母語である日本語の相対化と作家意識の成立、日本語文学の将来性などについて、活発な討論と質疑応答を行なった。

本報告集は、研究発表の原稿と、作家座談会の記録（各自の言語表現をなるべくそのままにとどめる）と、総合討論会の内容をまとめたものである。さらに、本シンポジウムに関するマスメディアの報道の一部分をも附録として収録している。日本語文学の研究の布石の一つになるものと思う。

今回のシンポジウムを契機に、日本語文学への関心が高まり、日本語文学に関する総合的な研究が広く深く展開されていくことを期待している。

郭 南燕